

見出すことができる。自然災害の生起は、つねに人間の営みに対抗する圧倒的な暴力の発露であり、その猛威は有意義な世界を破壊するとともに、そこに住み慣れ親しんだ環境の無力さをあらためて暴露する。けれども、そのなかに「すでに投げ入れられてしまっている」現存在は、そこから逃げ出すことができない。荒れ狂う自然の暴力に対するこの徹底的な無力さを、現存在は自らの有限性として、恐怖と不安の直中で引き受けざるをえないのである。それはつまり自然災害の開示が第一義的には、現存在の「被投性」のうちでなされることを意味する。あらゆる理解や解釈を拒絶しつつ「不条理」に生起する自然の暴力は、何よりもまず、われわれの存在の事實的な被投性において、その根本気分を通じて、直接的に経験されるのである。

## 第十二部会

### キルケゴールにおける地域主義の問題

須藤 孝也

キルケゴールによれば、倫理が人間の内部に見出される真理であるのに対し、キリスト教は宣べ伝えられる真理であり、いわば人間の外部から人間にもたらされる真理である。そしてまたキルケゴールは、キリスト教の真理は信仰される対象であり、論証される類の真理ではないとした。少なくとも論証に着目する限りでは、キルケゴールのキリスト教は、普遍性から切り離されている。

キルケゴールは、キリスト教の真理性を証明することなく、もっぱら「真のキリスト者」の在り様を書くことで、デンマーク社会の宗教改革を成し遂げようとしたのだが、彼がそのような戦略を採りえたのは、デンマーク社会に住む人々は皆キリスト教徒であることを自負している、という認識があったためであった。また、確かにキルケゴールは当時のデンマーク国家教会が示したキリスト教についての理解を厳しく批判したけれど、これは彼のキリスト教理解が非デンマーク的であったことを意味しない。そのキリスト教理解はデンマークの思想文化と異質なものは全くなく、それはデンマークの文化的宗教的伝統の中でこそ醸成された、多分にデンマーク性ないし北歐性を帯びたものであった。

以上のように見るとき、キルケゴールは、哲学的にはドクサ

に陥り、文化的には地域主義に終始したことを否定的に評価しなければならぬようにも思えるが、ここで地域主義と道徳の関連について詳しく考察しているM・ウォルツァーの議論を参照してみたい。ウォルツァーの道徳理解からすれば、キルケゴールが示した道徳である「キリスト者」という理想の実存がデンマークの地域文化に深く根ざしたものであったことは、何ら批判されるべき点ではなく、むしろ積極的に評価されるべきものというようになるであろう。キルケゴールはデンマーク社会という「キリスト教界」の内部で、これを改革するために、その社会がすでにもっていた伝統を活用した。このことは、その道徳が非現実的な道徳とならないために、すなわちその社会に実存する人々によって十全に生かされるためには、必要不可欠なことであった。

確かに、哲学的、思想的には、ヨーロッパ哲学やキリスト教は、現代において広く世界中に知られるようになった。したがって、もはや国家や地域を単位にした「キリスト教界」概念は、現代世界の实情にそぐわなくなったと言える。ヨーロッパという地域の「キリスト教」であれ、デンマークという地域の「キルケゴールのキリスト教」であれ、実際にその他の地域に暮らす人間にとって魅力的に思われるかもしれないし、その真理性が哲学的に普遍的に基礎づけられる可能性もあるかもしれない。

しかし本発表が考察の対象としたのは、そのようなキルケゴール思想の哲学的可能性ではない。キルケゴールのキリスト者は、十九世紀前半のデンマーク社会とは無関係に「単独に」生

きられるべきものではなく、むしろその特定のキリスト教社会のうちで生きられるよう構想されていた。したがってこれに、あるいはその他の地域においても活用可能な「現代的意義」が認められるとしても、それは、キルケゴール思想の内部に見出されるものではなく、むしろこれに対して外部にある何らかの社会状況との間を行き来することによってこそ知られるはずである。

#### 呪詛と自己犠牲

——キルケゴール思想における祈りの本質——

中里 巧

キルケゴール思想の根幹が罪責観にあることは、明らかであろう。そして、彼の罪責観は土俗的呪詛から多大な影響を受けているということも、間違いないことである。土俗的呪詛というのは、キルケゴールの父、ミカエル・ペーダーセン・キエルケゴールがおこなった呪詛のことである。一七六八年二月ユラン半島西部の小村セディングで羊の番をしていた一二才のおり、貧しさと辛さから神を幾重にも呪った。この出来事は、キエルケゴール家の秘密であるとともに、キエルケゴール思想生成における決定的要因となった。この出来事は、父ミカエルにおける罪責意識というキリスト教神学カテゴリーによって理解されてきたが、一八世紀中頃セディング村とその周辺の宗教習俗のなかに、キリスト教神学や教義学とはまったく異質な土俗的なものがお生き残っており、少年ミカエルによる呪詛行為は、むしろそうした非キリスト教的—土俗的宗教習俗に起因